

在宅要介護高齢者のホーム・ヘルパーへの依存（第2報） ：介護満足度および幸福感との関連

富山大学保健管理センター 竹澤みどり

A study of the dependence on home helpers by elderly receiving care at home (2):
Relation to the satisfaction with the home helper's care and subjective well-being
Midori Takezawa (Center for Health Care and Human Science, University of Toyama)

キーワード：依存、高齢者、在宅介護、主観的幸福感

Key words: dependence, elderly, home care, subjective well-being

本研究では、高齢者のホーム・ヘルパーへの依存が適応的な機能を有するかを明らかにするために、主体的に要望を主張し依存する「能動的依存」およびヘルパーが必要と判断した援助を提案し、高齢者が必要と感じたときにその援助を受け入れる「受動的・選択的依存」とホーム・ヘルパーの仕事への満足感、主観的幸福感との関連について検討した。要介護（または支援）認定を受け、在宅でホーム・ヘルパーを利用している高齢者129名を対象に質問紙調査を実施した。分析の結果、どちらの依存においてもより高い高齢者の方がホーム・ヘルパーの仕事への満足感が高いことが示された。また、独居の高齢者においてのみ「選択的・受動的依存」が高い方が主観的幸福感が高いことが示された。

問題と目的

従来、依存は幼少期には主にその適応的機能に注目され、青年期以降になるとその問題点が注目されることが多く、依存を脱却して自立を達成することが重要視されてきた（竹澤・小玉，2006）。しかし、依存は変容しながらも生涯を通して存在し続け、自立の獲得・拡大に必要なものであるという指摘もある（高橋，1968a，1968b，1970）。高齢期においても、依存の役割は非常に重要であると考えられるようになっている（Montenko&Greenberg，1995）。加齢による心身機能の低下を完全に回避することは不可能であり、年齢を経るに従って生活に必要な不可欠な様々な活動を自力で行うことが困難となっていく。そのため、加齢に伴って他者に依存しなければならない機会が必然的に増えてくる。一方で、現代社会では高齢者に自立を求める傾向が強まっているという指摘も

ある（杉井，2002）。実際、高齢者自身も自立を求める傾向が強く、依存することに対して不全感や無力感を感じやすいため、依存することによるストレスが高いことが示されている（Sousa&Figueiredo，2002；Gustafsson，Anderson，Anderson，Fjellstrom & Sidenvall，2003）。したがって、他者に依存することが必要となった高齢者が負担なく、より良い生活を送るためには、どのような依存のあり方が適応的なものであるかを検討することが必要であると考えられる。

竹澤（2009，2010）は、要介護（または支援）認定を受けた高齢者の介護専門職（特に、ホーム・ヘルパー）への依存に焦点を当て、適応的な依存のあり方について検討を行った。ホーム・ヘルパー（以下、ヘルパー）との関係が良く、ヘルパーの利用によく適応している高齢者はより適応的な依存のあり方を実践できていると考え、そのような高齢者を対象とした面接調査によって、よ

り適応的な依存のあり方を探索的に検討した。その結果、適応的な依存のあり方を実践できていると考えられた高齢者において、2種類の依存が見いだされた。一つは高齢者が主体的にヘルパーに要望を伝えて依存する「能動的依存」、もう一つはヘルパーが必要と判断した援助を提案し、高齢者が必要であると判断した時にその援助を受け入れるという「受動的・選択的依存」であった。これらの依存は共に対象とした高齢者の介護状況および生活全体をよりよくするために寄与していると考えられた。しかし、調査対象者がヘルパー利用に適応している高齢者のみであったことから、さらに対象者を広げて検討することが必要であると考えられた。そのため、面接調査から見いだされたこれらの依存について更なる検討を行うために質問紙調査を行い、第一報（竹澤，2011）では、これらの依存と自立、介護者（ヘルパー）の態度との関連を検討した。本論文では、第一報では分析に含めていなかった、依存と介護への満足感および高齢者の主観的幸福感との関連を検討することを目的とする。

本研究ではこれらの依存を実践している高齢者がヘルパーの介護に対するより高い満足感、主観的幸福感を有するのかを検討する。自分が困っていたり、必要性を感じているときには、積極的にヘルパーに援助の要請を行うことによって、無理に行動したり、必要以上の我慢をしてしまう機会を減らすことが可能であるだろう。また、ヘルパーが現在の介護において不足している援助や高齢者がよりよく生活するために必要であるが、現在は提供されていない援助について、高齢者に提案することによっても高齢者が無理をする機会を減らすことが可能であると考えられる。それによって、高齢者はヘルパーによって提供される介護により満足感を感じやすく、生活全般においても負担が比較的少ない、よりよい生活を送ることが可能となると考えられる。

日本においては、家族が重要なサポートの源泉であるとされている（古谷野，2006）。したがって、独居の高齢者にとっては、ヘルパーが主たる

介護者であることが多いが、家族が同居している場合には主たる介護者は家族となる場合が多いと考えられる。そのため、家族が同居している場合は同居していない場合に比べて、ヘルパーへの依存が高齢者の主観的幸福感に与える影響は少ないと考えられる。そこで、本研究では同居の有無も要因に含めて検討することとする。仮説は以下のとおりである。

- 仮説1：「能動的依存」「受動的・選択的依存」のどちらにおいても、それらの依存行動をより多く行っている高齢者の方がヘルパーの介護に対する満足感が高いだろう。
- 仮説2：独居の高齢者においては、「能動的依存」「受動的・選択的依存」のどちらにおいても、それらの依存行動をより多く行っている高齢者の方が主観的幸福感が高いだろう。家族と同居している高齢者においては、依存の高低によって大きな違いは見られないだろう。

方法

調査手続き：社会福祉協議会を通してケア・マネージャーに調査協力を依頼し、在宅でヘルパーを利用している高齢者に調査票を配布してもらった。調査票と一緒に本研究に関する説明を記載した用紙と切手を張った返信用封筒を同封した。回答後、調査票を返信用封筒を用いて返送してもらった。希望者には謝礼として500円分の図書カードを送付した。275部配布し、139部回収された（回収率50.5%）。そのうち、欠損値の多いものを除いた129名を分析対象とした。

被調査対象者：要介護（または支援）認定を受け、在宅でヘルパーを利用している129名（男性39名・女性90名）を対象とした。そのうち家族と同居している人は63名（48.8%）、独居の人は64名（49.6%）、不明が2名（1.6%）であった。平均年齢は80.23歳（ $SD=7.95$ ）、ヘルパー利用期間は平均5.8年（ $SD=5.87$ ）であった。対象者の介護レベルをTable 1に示した。

Table 1 被調査者の要支援・要介護度

要介護 (要支援) 度	人数 (%)
要支援 1	21 (16.3%)
要支援 2	38 (29.5%)
要介護 1	21 (16.3%)
要介護 2	22 (17.1%)
要介護 3	7 (5.4%)
要介護 4	12 (9.3%)
要介護 5	2 (1.6%)
不 明	6 (4.7%)
合 計	129

調査内容：年齢、性別、介護（支援）レベル、家族との同居の有無、ヘルパー利用期間を尋ねた。それに加え、以下の尺度を用いた。

- (1) 在宅要介護高齢者のヘルパーへの依存尺度（以下、依存尺度）：竹澤（2009）をもとに、「能動的依存」を表す5項目、「受動的・選択的依存」を表す6項目を独自に作成した。4件法（1：「いつもそうしている」、2：「時々そうしている」、3：「あまりそうしていない」、4：「全くそうしていない」）で回答を求めた。因子分析の結果、「受動的・選択的依存」、「能動的依存」の二つの下位因子に分かれた（竹澤，2011）。
- (2) 訪問介護利用者総合満足度（須賀，2003）：ヘルパーの仕事への高齢者の満足度を測定するために用いた。回答は各質問について5件法（1：「大変満足している」、2：「どちらかと言えば満足している」、3：「どちらとも言えない」、4：「どちらかといえば満足していない」、5「ぜんぜん満足していない」）で求めた。
- (3) PGCモラルスケール（古谷野，1996）：主観的幸福感を測定するために用いた。回答は、古谷野（1996）を基に、2または3件法で回答を求め、モラルの高い人が選択する回答には1点、そうでない回答には0点を配した。

その他、訪問介護利用及びそれに対する評価、高齢者の自立度を測定する尺度が含まれていたが、本分析では用いていない。

倫理的配慮：研究に関する説明を記載した用紙にて、研究の目的と意義について説明した。さらに、回答は統計的に処理され個人が特定されることはないこと、研究目的以外に利用することはないこと、調査への協力は自由意思に基づくもので、回答しなくても不利益を被ることがないことを書面にて説明した。無記名で回答を求めたが、希望者には謝品を送付するため氏名と住所の記載を求めた。調査時期：2009年10月～12月に実施した。

結果と考察

まず、依存尺度、訪問介護利用者総合満足度の各回答について、得点が高い方が頻度や満足度が高くなるように数値を反転させて得点化した。各変数間の相関係数をTable 2に示した。

「能動的依存」、「受動的・選択的依存」の各得点を、平均値を基準に、それぞれ高群低群に分けた。

Table 2 各変数間の相関

	I	II	III	IV
I 受動的・選択的依存		.61**	.57**	.16
II 能動的依存			.35**	-.08
III ヘルパーの仕事への満足感				.15
IV PGCモラル				

** $p < 0.1$

ヘルパーの仕事への満足感との関連 「能動的依存」の高群／低群および家族との同居／独居を独立変数、ヘルパーの仕事への満足感を従属変数として、2要因分散分析を行った（Table 3）。その結果、「能動的依存」の高群／低群においてのみ主効果が有意であり（ $F_{(1,105)} = 7.97, p < .01$ ）、高群の方が満足度が高かった。同様に、「受動的・選択的依存」の高群／低群および同居／独居を独立変数、ヘルパーの仕事への満足感を従属変数として、2要因分散分析を行った。その結果、

Table3 各群におけるヘルパーの仕事への満足感の平均・(標準偏差)、分散分析結果

		同居	独居	同居の有無	群間差	交互作用
受動的・選択的依存	低群	3.84(0.90)	4.68(0.48)	0.53	35.84**	0.00
	高群	3.73(0.83)	4.58(0.58)		低群<高群	
能動的依存	低群	4.16(0.85)	4.58(0.64)	2.07	7.97**	0.03
	高群	3.90(0.94)	4.38(0.79)		低群<高群	

** $p<0.1$ * $p<0.5$

「受動的・選択的依存」の高群／低群においてのみ主効果が有意であり ($F_{(1,96)}=35.84$, $p<.001$)、高群の方がヘルパーの仕事への満足感が高かった。以上より、高齢者が必要な時にはヘルパーに要望を主張することによって依存でき、ヘルパーから必要な援助の提案がよりされている方が、よりヘルパーの仕事に対する満足感が高くなることが明らかとなった。よって仮説1は支持された。

主観的幸福感との関連 「受動的・選択的依存」の高群／低群および同居／独居を独立変数、PGCモラル得点を従属変数として、2要因分散分析を行った。その結果、交互作用が有意であったため ($F_{(1,78)}=4.48$, $p<.05$)、単純主効果検定を行った。その結果、独居群において有意な差がみられ、独居群では高群の方がPGCモラル得点が高かった ($F_{(1,78)}=7.14$, $p<.01$) (Table 4)。

独居高齢者は、「受動的・選択的依存」が高い人のほうが、つまり必要なときにヘルパーから援助が提供されているほうが、主観的幸福感が高かった。しかし、家族と同居している場合では違いが見られなかった。一方、「能動的依存」の高低に関しては、有意な主効果が見られなかった。この理由としては、他者に対して依存する必要があるという状況が、一人では十分にできない、困っている状況であり、その時点で主観的幸福感が低いことが推測される。その一方で、困った状況が、

依存することで解消されることが負担の低減につながり、結果的に主観的幸福感を高める可能性もある。そのため、今回の分析では有意な主効果が見られなかった可能性が考えられる。この点については、更なる検討が必要であろう。以上より、仮説2においては、「受動的・能動的依存」においてのみ支持された。

本研究の限界と今後の課題

本研究では、ヘルパーへの依存がヘルパーの仕事への満足感や主観的幸福感に寄与することが示された。しかし、本研究の調査対象者は、在宅で介護を受けている高齢者のみであった。高齢者がどのような環境で介護を受けているかによって、依存対象との関係性が大きく異なると考えられる。したがって、本研究で得られた結果は、在宅で介護を受けている高齢者のみに適応可能である可能性も大きい。したがって、今後は様々な介護環境にある高齢者を対象とした研究を行う必要があるだろう。さらに、本調査対象者は自身で質問紙調査に回答可能な高齢者であり、自身で要望を主張することがある程度可能な高齢者と考えられる。介護度が比較的重い高齢者の場合には、依存する程度は大きくなり、その内容や依存の仕方も大きく異なってくると考えられる。したがって、今後

Table4 各群における主観的幸福感の平均 (標準偏差)、分散分析結果

		同居	独居	同居の有無	群間差	交互作用
受動的・選択的依存	低群	8.94(5.19)	7.35(3.95)	0.28	2.88	4.48*
	高群	8.52(4.72)	11.18(4.00)			
能動的依存	低群	10.20(4.65)	7.10(4.49)	0.02	2.81	2.38
	高群	8.84(4.21)	8.71(4.50)			

** $p<0.1$ * $p<0.5$

は比較的介護度の重い高齢者における依存の様相についても検討することが必要であると考えられる。

引用文献

- 古谷野亘（1996）. 老年精神医学関連領域で用いられる測度 QOLなどを測定するための測度(2) 老年精神医学雑誌, 7(4), 431-441.
- 古谷野亘（2006）. 高齢期の社会関係－日本の高齢者についての最近の研究－ 聖学院大学論叢, 21(3), 1914-200.
- Gustafsson, K., Andersson, I., Andersson, J.& Sidenvall, B.(2003). Older women's perceptions of independence versus dependence in food-related work. *Public Health Nursing*, 20, 237-247.
- Sousa, L. & Figueiredo, D. (2002). Dependence and independence among old persons－realities and myths. *Reviews in Clinical Gerontology*, 12, 269-273.
- 須加美明（2003）. 訪問介護の質を測る利用者満足度尺度案の開発 老年社会科学, 25, 325-338.
- Montenko, A.K.& Greenberg, S.(1995). Reframing dependence in old age: a positive transition for families. *Social Work*, 40, 382-390.
- 高橋恵子（1968 a）. 依存性の発達的研究Ⅰ－大学生女子の依存性－ 教育心理学研究, 16, 7-16.
- 高橋恵子（1968 b）. 依存性の発達研究Ⅱ－大学生女子との比較における高校生女子の依存性－ 教育心理学研究, 16, 216-226.
- 高橋恵子（1970）. 依存性の発達的研究Ⅲ－大学生・高校生との比較における中学生女子の依存性－ 教育心理学研究, 18, 65-75.
- 竹澤みどり（2009）. 在宅高齢者のホーム・ヘルパーへの依存構造－面接調査から－ 日本健康心理学会第22回大会, 147.
- 竹澤みどり（2010）. 在宅要介護高齢者とホーム・ヘルパー間の依存と自立の構造－修正版グランデッド・セオリー・アプローチを用いた分析から－ ヒューマン・ケア心理学研究, 11, 70-85.
- 竹澤みどり（2011）. 在宅要介護高齢者のホーム・ヘルパーへの依存と自立（第1報）：ホーム・ヘルパーの介護態度との関連 学園の臨床研究, 10, 67-74.
- 竹澤みどり・小玉正博（2006）. 適応的依存とは？：依存概念の再検討 筑波大学心理学研究, 31, 73-86.

付記

お忙しい中、快く調査に協力して下さったケア・マネージャーやホーム・ヘルパーの方々、社会福祉協議会の方々、調査に回答いただいた高齢者の方々に心より御礼申し上げます。また、本研究は文部科学省科学研究費補助金（若手研究（B）課題番号20730442）の助成を受けて実施され、日本ヒューマン・ケア心理学会第13回大会（大阪市立大学）において発表したものである。